

# 万葉こころと王朝こころ

澤 瀉 久 孝

天皇賜二鏡王女二御歌一首

妹之家毛いまがいえも 繼而見麻思乎ついでみましを

山跡有やまとなる

大島嶺尔おほしまのねに

家母有猿尾いへもあらましを

一云妹之當、繼而毛見  
武尔 一云家居麻之乎

(卷二・九二)

この本文の「家もあらましを」の「家」を従来作者、即ち天皇の家と解釈してゐたのを、山田孝雄博士の講義に  
なれば上下相応しないとして、下の「家」も「妹が家」とせられたのに従ふべきである。然るに講義では一云の方  
も同様に解すべきだと言はれてゐるのには従ひがたいのである。一云の方では「妹が家もつぎて見ましを」でなく「妹  
があたりつぎても見むに」となつてゐる。そして結句が「家居らましを」となつてゐる。それだと見たいのは「妹が  
家」でなくて「妹があたり」であり、それを「つぎても見るに」とつゞくのだから「家居らまし」といふ「家居る」  
主は「見むに」といふ作者だといふ事になる。即ち一云の方では「家」は作者の家になるわけである。本文の解釈と  
一云の方の解釈とは違ふことになるのである。齊藤茂吉氏も万葉秀歌で、本歌の意が、天皇御住ひが大島の嶺にあれ  
ばよいといふ意ではあるまいとして「若しさうだと、歌は平凡になる。或は通俗になる。ここは同じことを繰返して  
ゐるので、古調の單純素朴があらはれて来て、優秀な歌となるのである。」と述べられてゐる。山の上に妹を置くこ  
ととみづからを置くことをくらべると、後者はたしかに通俗であり、散文的であるが、右の本文と一云とを較べる  
と、後者は表現そのものも散文的で、歌の意と調とが二にして一であることが明瞭に認められるのである。しかも万  
葉では一云の解釈をとらないで本文の解釈をとり、これを本文としてあげたのである。それが王朝期に入ると古今六  
帖では、

妹があたりつぎて見てまし大和なる大島みねに家もあらしを（第二、「家」）となり、玉葉集には次の答の歌が載せられ、その詞書の中に、

妹があたりたえずも見むと大和なる大島みねに家居せましや（第九）とあり、新千載集には

妹があたりつぎても見むと大和なる大島みねに家居せましを（第十四）となつて、いづれも一云の解釈がとられるやうになつたのである。

一松 幾代可歴流 吹風乃 声之清者 年深香聞（卷六、一〇四二）

の第四句を従来コエノスメルハと訓んでゐたのを井上通泰氏の「新考」にコエノキヨキハと改められたがその説は殆どかへりみられなかつた。その後私は「キヨキ」と訓むべき事をのべ、武田祐吉博士の「全註釈」それによられた。

「澄む」といふ語は、

布智毛世毛 伎与久佐夜気志 波可多我波 知止世乎万知天 須壳流可波可母（統紀、宝亀元年三月）

とある「須壳流」が仮名書の初出のもので、万葉には「清江」の地名があるだけで「澄む」の用言を作中に用ゐた例はないのである。それがたとへば月に対して「すむ」とある例を源氏物語に求めると、

月は入方の空清う澄み渡れるに（桐壺）

雲の上も涙にくるる秋の月いかですむらむ浅茅生のやど（同）

今めきたる物の声なれば清くすめる月に折つきなからず（帚木）

月の澄む雲居をかけて慕ふとも此の夜の闇になほや惑はむ（賢木）

あはと見む淡路の島のあはれさへ残る隈無く澄める夜の月（明石）

などいくらもあげる事が出来るが、月に対して「清し」の語の用ゐられたものは、右にあげた「清くすみ渡れる」

「清く澄める」の如く、「澄む」の修飾として用ゐられたもの二つばかりをあげ得るにすぎないのである。然るに万葉には月に「澄む」とあるものなく、清しの語を用ゐたものは、

吾が背子がふりさけ見つゝ歎くらむ清き月夜に雲なたなびき(巻十一・二六六九)

月よみの光を伎欲美神島のいそまの浦ゆ船出すわれは(巻十五・三五九九)

など十数例をあげる事が出来るので、万葉の「清し」が源氏の「澄む」に置きかへられてゐることが明瞭に認められるので、今の「清」をスメルと訓む事に困惑を抱くのは、源氏を読む心で万葉を見る誤を犯した事になるのである。

次に「声」「音」をオトともコエとも訓むのが万葉の例であり、「可治能於等」が「梶之音」(七・一一五二)とも「梶之声」(四・五一九)とも書かれるのが万葉の例である。「風声」「水声」といふ漢語があるからカゼノコエ、ミヅノコエと云つたと考へるのは誤である。「ゆく水の於登もさやけく」(十七・四〇〇三)であり、

わがやどのいささむら竹吹く風の於等のかそけきこのゆふべかも(十九・四二九一)

とあり、「春風之 声四出名者」(四・七九〇)が認められてゐるとすれば、「吹く風の」をうけるものはオトノキヨキハである事問題はないはずである。それをコエノスメルハと訓んで疑はなかつたのは「声」をコエと訓む事になつた後世心の訓み誤りにすぎないのである。

馬雙而 今日吾見鶴 住吉之 岸之黄土 於万世見(巻七・二二四八)

の初句が天曆本に「駒雙而」とあり「こまなへて」とあるにより「馬」を「駒」に改めてコマナメテと訓む説が近頃行はれてゐるが、万葉では「馬數而」(一・四)、<sup>ウマメテ</sup>「馬副而」(一・四九)、<sup>ウマナメテ</sup>「馬並而」(三・二三九)、<sup>ウマナメテ</sup>「宇麻奈米成」(十七・三九九)とあつて、コマナメテの例はないのである。それが古今集以後になると、

駒なめていざ見に行かむ故郷は雪とのみこそ花は散るらめ(古今集卷二)

駒なへていざ見に行かむ立田川白浪寄する岸のあたりを(千載集卷十八)

駒なへていく野のおくの人里に見ゆる煙やしるべなるらむ(正治二年院御百首)

駒なめてうち過ぎ給ふにも、心のみ動くに露ばかりなれど、いとあはれに忝く覚えてうち泣きぬ(源氏物語、濤標)などと「駒なめ(へ)て」ばかりで「馬なめて」はないのである。一体古今集以後では歌語には「馬」とは言はないで「駒」といふのである。

まづ恋しき人の御事と思ひいで聞え給ふにやがて馬引き過ぎておもむきぬべくおぼゆ。

秋の夜のつきげの駒よわが恋ふる雲居に翔れ時のまも見む(源氏物語、明石)

それが万葉集では馬は六十例に近く、駒は卅例あまりである。駒の用例は特に東歌に多く、用例の半数は東歌と防人歌とで占められてゐて、その他で駒といふ語が単独に用ゐられてゐる例は僅かに五例に過ぎない。万葉では松を小松といふのは歌語であるが、馬を駒といふのはまだ歌語になりきつてゐないのである。それが古今集以後では歌ではウマと言はないでコマといふのだから万葉に「馬」と書いてあつてもコマと訓んでしまふのである。たとへば、

玉きはる春の大野に馬数<sup>ウマナメテ</sup>而朝<sup>アサ</sup>ふますらむ其の草深野(卷一・四)

の如き今日ウマナメテと訓んで誰も疑はないものでも元曆本に「こまなめて」と訓んでゐるのである。さうした訓が本文の文字をかへてしまつたのが卷七の一例だと言へないであらうか。

余呂豆代等 許己呂波刀氣氏 和我世古我 都美之手見都追 志乃備加祢都母(卷十七・三九四〇)

「いつまでも変わるまいと二人の心は解けて、吾が背子が撮んだ手を見ながら思ひに堪へかねましたよ。」といふ意だと思ふが、その「つみし手」の「手」を諸本に「乎」とあるのは「手」の字の誤で、元曆本に「手」とあるに従ふ。

さてその「つみし」の意を真淵の考に「つみしはつめる事也 つまむは爪をむかへる事也」とし、古義には「波波能美許等波 美母乃須蘇 都美安氣可伎奈渥(廿・四四〇八)の例や、

秋来れば野べにたはるる女郎花いづれの人かつままでみるべき(古今集卷十九)

よみ人しらす  
藤原興風

の例や、源氏物語の

その人なめりと見給ふに、いとをかけしければ、大刀抜きたるかひなをとらへて、いといたうつみ給へれば、ねたきものから、え堪へで笑ひぬ(紅葉の賀)

などの例をあげて「つまむことなり」と言ひ、「吾が夫子が、吾が手足などを拊りし其時、まのあたりに相手ながら、今かく迄に別れ居て、慕に堪むとすれど、さても得堪「忍ばれぬことよ、となり」と詠し、それ以来諸注多く「抓

った」と訳されたが、土屋文明氏の私注に「そこまで考へなくもよいだろう。採むの用例の一変異と見ればよい。卷二十(四四〇八)の家持作中の『み裳の裾ツミアゲかきなで』のツミと同じく、取り上げる意、せいぜいツمام意と見るべきであらう。嘗ての或る日、心解け合ひ取り上げられた手を見るにつけ、思に堪へないといふ心持であらう。尤も是非ツネリたい人、ツネラレたい人はみ心のままである」とし、武田博士の全註釈にも「抓ミシ手とする説が有力である。本集には珍しいきわどい句なので、疑問もあるが、これに代わるべき案もない。但しツミシ手といつても、取った手という程度にも解せられる。書のことをテというが、それではツミシは積ミシの義として多く送った意とすべきか」と異説を述べられた。しかしその評語では「四句を、抓ミシ手見ツツと解すれば、この作者には珍しい特殊な歌になる。ひとりこの作者のみならず、本集でも珍しく、平安時代の歌にもない。かつて逢った日の追憶の歌も多いが、全く特殊の追憶になっている。しかしそれは小唄ふうの情趣であるが、紐を解くことをしばしば歌ふ万葉集の風格からいえば、かようなきわどい内容の歌の出ることも、その性質の中に存するものといえよう」と言はれてゐる。「つむ」の語は古義に引いた源氏物語の例やまた同じ物語の、

人聞きも傍痛きことと思ふ給へて、降魔の相をいだして、つと見奉りつれば、いとむくつけく下衆下衆しき女と思して、手をいとたくつませ給へるこそ、直人の懸想だちて、いとをかしくも覚え侍りつれ。(東屋)

とあるのなどは「げすげすしき女と思して」とあり、「直人の懸想だちて」とあつて、これらは「抓つた事」であり、「きわどい」——わざと云つてよい。しかし万葉の「つまみあげ」(廿・四四〇八)や古今集の「つむ」までをさう見るのは当たらないと思ふ。今の「心は解けて」につゞく動作としての「つむ」は、やはり静かにつまむ事と解すべきだと思ふ。そこに万葉の心があるのである。紐を解く事と手を抓める事とは同じではない。

上つ毛野安蘇のま麻群かき抱き寝れど飽かぬを何どが吾がせむ(十四・三四〇四)

高麗錦紐解き放けて寝るがへにあどせろとかもあやにかなしき(同・三四六五)

と歌ふのは万葉どころであつて、左手の指を抓つて反応を見ようとするのは源氏心であつて万葉心ではないのである。

万葉集を読む以上は万葉ころを明らかにする事が大切だと思ふのである。

(四二・一〇・三)